戦後占領期の日本で、

福島で日本語の可能性探る

「日本語を西洋 父の著作を手にする真理さん。 の言葉に負けない言語にしたいという壮大な構 想があった」と父の思いを語る

て、日本に対する愛だった

制の学園に戦災孤児を受け 庭に青葉学園を創設。寄宿 育を実現しようと福島市茂 46年6月、自らの理想の教

後、理想的な子どもの教育 子どもの言語発達などを研 を追い求め、児童心理学、 た砂さんは早稲田大卒業 市)で1903年に生まれ 究した。そして終戦翌年の 香川県志度町(現さぬき

を実践、日本語の可能性を 小さな子どもでも簡単に読 入れ、難しい漢字ではなく、

み書きできるローマ字教育 て開園にこぎ着けた。 情熱、そして孤児となった たい」という学者としての ーマ字教育の効果を実証し 親として育てたい」 学園創設の原動力は「ロ o k u a y a m a n o もローマ字を使った。「〇 教育を受けた。理科や国語 むと、1年余りの準備を経 などのノートにも、日記に して福島市に家族で移り住 あり、子どもたちは独自の 学園には付属の小学校が n ok u no tokor o y a m とで窮地を脱した。だが、 時は閉鎖を考えたが、48年 され、公的支援を受けたこ が残されている。 当時を回想して詠んだ短歌 むわが術なくて」。後に それぞれに 子らは持ちけ 多くの子どもたちを受ける に児童福祉施設として認可 学園の経営は厳しく、

字で童話を創作したことも masita] - CDIV tiisana ーマ字の位置付けが次第に ローマ字教育を諦めざるを 得なくなった。 れたことで環境が変化し、 を本当に熟した、もっと洗 いくこと。それは父にとっ 練された言語に発展させて 真理さんは言う。 低下し89年、砂さんは86歳 で静かに息を引き取った。 その後、国語教育ではロ 「日本語

争が激化の一途をたどって

たいという思いだった。戦

m u r a

子どもたちを親として育て

0

n i

が安全に暮らせる土地を探あった。

理さん(77)は、亡き父の思 者の三尾砂さんの長男真 語学者でローマ字教育研究 の場が、福島市にあったこ 壮大な構想があった」。国 盤とした、西洋の言葉に負 本語をローマ字で表記する けない言語にしたいという 本語を解き放ち、音声を基 とを知る人は多くない。「漢 が広がった。その教育実験 べきだという「ローマ字論」 いを代弁する。 ずという文字の束縛から日



青葉学園で子ども たちと寝食を共に した砂さん街

が知らぬ 悲しきことも 見逃さず、向き合った。「わ の笑顔の奥に潜む悲しみを しく育っていったが、孤児 した。子どもたちはたくま 共にして、家族同様に暮ら

学園の付属小学校は51年に閉鎖。学園 護施設として子どもたちの養育や自立 は55年に福島市土船に移転し、児童養 砂さんはローマ字の検定教科書などを 文部次官が1947年に「国民学校に から唱えられ、戦後一時的に高まった。 きだという「ローマ字論」は明治時代 支援を続けている。 編集した。ローマ字教育を進めた青葉 おけるローマ字教育実施要項」を通達、 習指導。日本語をローマ字で表記すべ ○ ローマ字教育 ローマ字によ

砂さんは孤児らと寝食を

▲10月1日 福島民友新聞掲載

記事から知り得たこと	調べてわかったこと、考えたこと
 	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
	
疑問に思ったこと、調べてみたいこと	
 	
	三尾砂さんの戦災孤児に対するローマ字教育と、親と
	ての育てたいという思い、青葉学園のホームページも

まえ、あなたの感じたことをまとめてみましょう。

